
バカと兄貴と召喚獣

直井刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと兄貴と召喚獣

【Nコード】

N4136BA

【作者名】

直井剎那

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作です。オリ主は明久と幼馴染であり、頼れる兄貴的存在である。そして明久が双子の兄という設定になり、明久の妹と明久と幼馴染のオリ主が秀吉、雄二、ムッリー二等のFクラスメンバーや翔子や愛子、優子などのAクラスメンバー達と楽しく可笑しく毎日を過ごしていく物語です。

プロローグ

僕たちが文月学園に入学してから2度目の春が訪れた。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っている。

別に花を愛でるほど雅な人間じゃないけど、その眺めには一瞬目を奪われる。

はずだったのだが……………

明久「遅刻だぁーっ！！」

なぜかと言うと、俺たちは初日の始業式からいきなり遅刻しそうになってるからだった。

何故こんな事になったかというと

……………

健「咲耶、そろそろ時間だから明久を起こしてきてくれるか」

俺は明久の家に住ませて貰っていて

いつものように朝食を作ってまだ寝ている明久を

明久の双子の妹の咲耶に頼んで起こしてもらっていた。

月火「わかったよ健君」

そして今日は文月学園2度目の始業式の日である。

咲耶「お兄ちゃん朝だよ！起きないと！」

明久が朝いつものように起こされていたのが始まりだ。

始業式当日の今日の朝方までゲームをしていたらしく全然起きなくて
やっと起きたと思ったら何故か昔の姉の制服を着ており、

また着替えるという作業をしていて気づいたら時間がヤバいということだ。

.....

健「これというのも、お前が寝坊して間違っで玲さんの制服なんか
着るからだぞー！」

明久「ご、ごめん。ゲームのキリがなくなくてさ」

健「昨日あれほど言っただろ！」

せめて始業式の日ぐらいは遅刻しなくなかったのに」

というわけで俺達は学園へと続く坂道を登っている。

長い坂道を登りきると

西村「吉井兄妹、神崎、遅刻だぞ」

……ドスのきいた声に呼び止められた。

明久「あ、鉄じー！ー西村先生、おはようございます」

健「鉄人ちつす！」

咲耶「西村先生おはようございます」

鉄人「吉井妹おはよう。それと吉井兄、今鉄人って言わなかったか？」

おお、鋭い。

明久「ははっ、気のせいですよ」

鉄人「ん、そうか？それと神崎は堂々と鉄人というな」

健「反省はしてるけど後悔はしてない！」

鉄人「後悔もしろ！……まあいい」

あついいんだ。

鉄人「それよりお前ら普通に『おはようございます』じゃないだろ」

明久・健「今日も肌が黒いですね」

鉄人「……お前らは遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？」

明久・健「そつちでしたか。すみません」

鉄人「まったくお前らは……まあいい。ほら、受け取れ」

鉄人が俺達にに封筒を差し出してくる。

宛て名欄には大きく俺達の名前が書いてあった。

咲耶「お兄ちゃんはこのクラスだった？」

明久「どうだろう？ 健と月火は頭良いからAクラスじゃない？」

咲耶「……どうだろうね」

咲耶は言葉を濁しながら言う。

……と、明久が封筒を開けるのに苦戦している時、

鉄人「吉井兄。今だから言うがな。

俺はお前を去年1年見てきて『もしかすると吉井兄はバカなんじゃないか？』

なんて疑いを抱いていた」

明久「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしてるようじゃ、更に『節穴』なんて渾名を付けられちゃいますよ?」

鉄人「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

そこで俺達が封筒を開けると

『吉井 明久……Fクラス』

『吉井 咲耶……Fクラス』

『雲雀 健……Fクラス』

鉄人「お前は『大馬鹿』だ」

明久「ってちよつと待ってください! まあ僕はFクラスかもしれな
いと思っっていたけど」

健「自覚はしてたんだ」

明久「……まあ。ってかなんで2人がFクラスなんですか?」

咲耶「それはねお兄ちゃん。

私、試験中に具合が悪くなって途中退席したからFクラスなの」

健「で、俺はその咲耶を保健室から連れて行くため教室から出たからFクラスになったんだ」

明久「……そうだったんだ」

鉄人「まあ俺個人としての意見だが、あの時の神崎の行動は良かったと思うているぞ」

健「ありがとうございます」

鉄人「さあ、なら教室に向かうんだ」

こうしてボクたちの二年目の高校生活が、幕を開けた。

キャラクター紹介？

吉井明久 よしいあきひさ

性別 男

身長 原作と同じ

性格 原作とほぼ同じ。

見た目 原作と同じ。

得意科目 日本史 世界史 保健体育（3科目ともAクラス並の点数）

苦手科目 得意科目以外（F）Eクラス並の成績）

召喚獣の装備 黒の改造学ランにいう格好。

武器は日本刀。腕に籠手の装備。

腕輪 まだ不明。

備考 観察処分者なのは原作と変わらないので操作は学園一上手い。
原作と同じく鈍感。

咲耶のことになると敏感になる。

また咲耶のことになると悪鬼羅刹と言われた雄二以上の力を
発揮する

吉井咲耶よっしやくや

性別 女

身長 163cm

性格 とても優しい女の子で

1度決めたことはやり通すと言う精神を持つ。

見た目 見た目は化物話の月火で星型の髪留めをしている。

髪の色は明久と同じ。胸はDカップ。

得意科目 現代文 古典 日本史 世界史

苦手科目 保健体育

召喚獣 和服の格好をしておりますに日本刀（小太刀）を腰に下げている。

腕輪 まだ不明。

備考 明久の双子の妹。

少し病弱体質。

成績はAクラス上位レベル。

かんざきけん
神崎健

性別 男

身長 178cm

見た目 fateに出てくるクー・フリーン（ランサー）の髪の色を黒にして

目の色も黒く染めた感じ。

性格 普段は温厚で優しく頼れる兄貴だが怒るとかなり怖くなる。

得意科目 英語・古典・化学以外（Aクラス並）

苦手科目 英語・古典・化学（Fクラスレベル）

召喚獣の装備 黒スーツに白のワイシャツ、赤のネクタイという格好。

ほうてんがけき
武器は方天画戟

腕輪の能力 まだ不明

備考 観察処分者ではないが明久に少し劣るぐらいの召喚獣の操作技術を誇る。

武術は雄二以上の運動神経がある。

家事能力も高いが料理は明久に劣る。

明久と咲耶の家に居候中。両親は海外で生活中。

そこで昔から吉井家と仲が良かったので一緒に住ませてもらっている。

自己紹介

明久「……なんだろう、このばかデカイ教室は」

咲耶「ねえ、ここ本当に教室なの？」

高級ホテルのロビーにしか見えないんだけど」

健「個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、

その他もろもろ豪華な品々…本当に勉強する環境か？ここは」

明久「…教室の設備に色々と突っ込みたいけど、

これ以上の遅刻はマズイし、僕達も教室に行こうよ！」

健「そうだな」

そうして俺たちはFクラスに向かう。

明久「ねえFクラスの設備って、どんなのだと思う？」

Fクラスの設備か？うーん…

健「純和風に、畳にちゃぶ台に座布団とか？」

明久「あ、それでお茶菓子と抹茶が用意されてて、壁に巻物が掛かってたり？」

抹茶よりお茶菓子が先に出てくる辺り、さすが明久だと思う。でも…

咲耶「Aクラスのドリンクバーが異常なだけだからそれはないと思

うよ？」

明久「そっか……じゃあ、あまり期待できないね」

咲耶「最低クラスの設備に期待する事自体間違ってるけどね」

明久「あはは、確かに。あ、着いたよ」

明久の言う通り、その教室には 2 - F と書かれたプレートが掛かっていた。

咲耶「じゃ、私から入るね」

明久「了解」

ガラッ

月火「ごめんなさい少し遅れました」

雄二「早く座れ！！このウジ虫や……って咲耶！？？」

どうしてFクラスに！？はっ！？」

明久「おはよう雄二。で今、僕の妹の咲耶のこと何て言ったのかな？

……ウジ虫って聞こえたんだけど僕の気のせいかな」

明久は雄二に殺気を向ける。

雄二「な！？明久か……い、今のは言葉のアヤだ。

決して咲耶に向けて言った訳じゃない。だ、だから許してくれ」

明久「……ならいいけど、次はないよ」

雄二「コクコク！」

健「相変わらず明久は妹に甘いな」

と、その時。

福村「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。
そこには寝ぐせのついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、
いかにも冴えない風体のオジサンが居た。

福村「それと席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

学生服も着てないし、これで十代だったら詐欺って感じなオジサン
だから、

この人がFクラスの担任なのか？鉄人じゃなくて助かった。

健「りょーかい」

明久「はい、わかりました」

雄二「うーっす」

咲耶「はい」

俺たちは人はそれぞれ好きな席に向かう。

咲耶は明久の隣に座り、俺は明久の後ろの席に座った。

福村「えー、担任の福村慎です、よろしく願いします。」

教壇に立つた福村先生は自己紹介をし、

黒板に名前を書こうしたがその手を止めた。

理由はチョークがないからである。

福村「皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があったら申し出て下さい。」

明久「これで不備がないって言う人に会ってみたいよ」

健「それは俺も同感だな」

それもそうだろう。机と椅子はなく、あるのは卓袱台と座布団。

さらに天井にはクモが巣を作り、畳は痛み、窓ガラスは所々テープが貼られている。

もちろんそれに関する苦情が次々と生徒から寄せられるが先生は我慢してくださいか、

自分で何とかしてくださいぐらいしか言わない。

福原「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

スクツ

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

そのまるで男とは思えない容姿にFクラスの面子は思わず見とれた。

だけど秀吉は男なんだがな……次はその前の少年が立った。

康太「……………土屋康太」

次に自己紹介したのは小柄な体の少年―土屋康太だ。

彼はムツツリー二というあだ名を持っているが本名よりも
そっちの方が知名度が高い。秀吉と康太とは去年からの付き合いだ

島田「島田美波です。海外育ちで日本語は会話できますけど読み書きが苦手です。」

あ、でも、英語も苦手です。趣味は――

ポニーテールで勝ち気な印象を与える少女―島田美波は一回区切り、

島田「吉井明久を殴る事です」

島田が明久に向かって手を振っている。

おい島田、明久が震えているぞ

咲耶「吉井咲耶です。」

試験日に体調を崩してしまい試験を途中退席してFクラスになりましたが、

皆さん優しそうな方々なのでお兄ちゃん共々よろしく願います」

本当にできた妹だなあ。

明久とは全然違うよな。

F「咲耶ちゃん良い子やなあ」

F「咲耶ちゃんかわいいなあ」

F「咲耶ちゃん結婚してほしい」

おい誰だラブコールしたやつ？

明久がカッターを取り出して殺気出してるぞ

淡々と皆が自己紹介をしていく。今度は明久に回ってきた。

明久「ーコホン。えーっと吉井明久です。気軽にダーリンと呼んでくださいね」

次の瞬間、

F「ーダアアーリーーン!!。」

野太い男の大合唱。

咲耶「お、お兄ちゃん……」

明久「ごめん咲耶……失礼、忘れてください。

それと咲耶ちゃんは僕の妹になりますが、

僕に取り入っても意味はないのでとりあえずよろしくお願いします」

F「ーーーそ、そんな馬鹿なああああ!!!!」

明久がそいうと皆が絶叫している。

おっ、次は俺の番だな。

健「神崎健だ。これからよろしくな。好きなことはゲームと食べる事だ！」

先に言うておくが俺の親友の明久と咲耶に手をだしたヤツは

L

ガ
シ
ヤ
ン

僕は仕込み棒を取り出し構えると

「健すからな。ということだ。よろしく頼むわ！」

[illegible]

Fクラスの皆は俺の仕込み棒を見て大人しくなった。

そこへ

「あの、遅れて、すいま、せん。」

F
「
「
「
えっ
？
「
「
「

全員がその声の方に目を向けるとそこには1人の女子生徒がいた。

『試召戦争』をやってみない？

福村「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんをお願いします」

姫路「は、はい！ あ、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします！」

途中から尻すばみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

F「はいっ、質問です！」

姫路「あ、はいっ。なんですか？」

F「何でここにいますか？」

傍から見れば失礼な質問だが、ほぼ全員がそう思っていた事だった。彼女は容姿も人目を引く程でテストでは1桁の順位に名を連ねている学力の持ち主でもある。

当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

姫路「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。

F「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

F「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

姫路の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。

それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

F「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

F「黙れ1人っ子」

F「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

F「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見て、俺は一言。

健「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久はうんうんと頷いた。

姫路「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします！」

姫路は逃げるように、雄二の近くの空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息について卓袱台に突っ伏してしま

雄二「よう姫路、体調は大丈夫か？」

姫路「えーっと…、あなたは…」

雄二「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

姫路「あ、姫路です。宜しくお願いします」

深々頭を下げる姫路。こーゆーところからでも彼女の育ちの良さが伺えるというものだ。

雄二「ところで姫路。体調の方はもう良いのか？」

明久「あ、それは僕も気になる」

明久が気になり姫路に声をかけた

姫路「あ、明久君！？」

明久の顔を見て、瑞希が驚いた。

雄二「姫路、明久が不細工ですまん」

姫路「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

明久「え？」

姫路「目もパッチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

雄二「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、俺はまさかと言った様な表情に。

明久「え？ それって」

姫路「そつ、それって一体誰ですか!？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

雄二「確か、久保……利光だったか？」

健「やっぱりか」

久保利光 性別（ノオス） 現在Aクラス所属

咲耶「お兄ちゃん元気出して」

雄二「おい明久、さめざめと泣くな」

健「よりもよって男に恋愛感情持たれてるなんてなるところなると思うぞ？」

雄二「……まあ、確かにな」

パンパン！

福村「はいはい。その人たち、静かに」

バキィッ！ パラパラパラ……

福村「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。

だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

福村「えゝ。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

健「どんだけ酷い設備なんだよ！？」

福村「これがFクラスです」

福村教諭の台詞に、何度目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

明久「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

雄二「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。姫路が怪訝そうな顔をして見送り、俺に問いかけた。

姫路「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

健「何だ、明久が気になるのか？」

姫路「え？　いつ、いえ、そういうわけでは……」

健「ふーん、じゃあそういうことにしとくよ」

俺は2人が出て行つた廊下をちらりと見て、すくつと立ちあがる。

秀吉は俺を見て。

秀吉「なんじゃ、またお主ら3人で悪だくみかの？」

健「さてな、どうだろうな。でも面白い事になりそうだ」

秀吉「やれやれ……まあお主らしいのう」

互いに笑いあつて、俺は1人気取られない様廊下へ。

雄二「んで、話つてなんだ」

明久「この教室のことだよ」

雄二「Fクラスか想像以上に酷いな」

明久「Aクラスは見た？」

雄二「ああ凄かったな。あんな教室は見たことないな」

明久「そこで僕からの提案、『試召戦争』をやってみない？」

健・雄二「戦争……だと（だつて）？」

明久「うん！って健！？いつの間に？」

健「明久こういう時は俺も混ぜろよな。水臭いぜ」

明久「うん、ごめん」

健「で、『試召戦争』するって？」

雄二「・・・何が目的だ？」

明久「もちろん！咲耶と姫路さんのためだよ！

あんな教室にいたら咲耶の体調が崩れちゃうかもしれないじゃないか！？」

雄二「そういうことか。まあ俺もやろうと思っていたしな」

健「そういう雄二は何で試召戦争をやろうと思ったんだ？」

雄二「世の中学力が全てじゃないってそんな証明を試してみたくな

それにAクラスための秘策も思いついた」

そういうと雄二は教室に入って行ったので俺と明久も教室に入った。

そして先生が戻ってきて再び自己紹介を再開した

須川「須川亮です。えー、趣味は……」

再び再開された自己紹介。

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原先生が坂本に声を掛けた。

福村「えーと、坂本君キミが最後ですよ。クラス代表でしたよね？

前に出てきてください」

雄二「了解」

そう言い雄二は立ち上がり教卓の前に向かった

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

さて始まるか

雄二「そしてAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

雄二「不満はないか？」

F「『『『大アリじゃあつ！！！！』』』」

不満大爆発だ。

雄二「だろう？ 俺だって不満だ。

このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている」

雄二は頷きながら同意する。

すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

F『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

F『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！あまりにも差が大きすぎる！』

F『そうだそうだ！』

引き継ぐように坂本は口を開いた。

雄二「みんなの意見はもつともだ。

そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

雄二は一呼吸おくと

雄二「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

雄二は戦争の引き金を引いた

俺はそれをふつと笑い

健「面白くなりそうだぜ」

と呟いた

こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！

雄二「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

F「そんなの勝てるわけがないだろ？」

F「これ以上設備が落ちたらどうなるんだ」

F「姫路さんがいたら何もいらなない」

F「咲耶ちゃんがいるだけで僕は満足です」

F「咲耶ちゃん結婚してk」

バキッ

F「フベっ！」

明久「言ったよね。咲耶に手を出したらって」

F「す、すみません」

雄二「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

F「無理に決まってやるじゃん」

F「そう言われても何の根拠もないしなあ・・・」

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した

雄二「それを今から証明してやる！

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いているんだ」

康太「……………！！」

そういつと康太は素早く立ち上がり首を横に振った。

姫路「えっ」

姫路さんは顔を赤く染めスカートを押さえた。

雄二「土屋康太 こいつがあ有名な寡黙なる性職者だ」
ムッリーニ

そういつと康太は首を横に振った
ムッリーニ

F「馬鹿な…奴がそうだというのか？」

F「見る！まだ証拠を隠そうとしているぞ…」

F「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」

雄二「それに姫路と吉井咲耶の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

咲耶・姫路「え？私ですか？」

この2人は学年トップ10に入っているほどの実力がある。
去年の成績だと姫路が学年次席で、咲耶が4位だったかな？

雄二「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

F「そうだ！俺達には姫路さんと咲耶さんがいるんだ！」

F「彼女達ならAクラスにも引けをとらない！」

雄二「それに木下秀吉だっている」

秀吉「ワシもか？」

F「演劇部のホープ！」

F「確かAクラスに木下優子っていう姉がいただろ」

雄二「そのほかにも島田もいる」

島田「えっウチ？」

雄二「島田は数学だけならBクラスに匹敵するだけ実力がある」

島田「頑張るわ」

雄二「それに神崎健もいる。皆も聞いたことがあるはずだ

『文月の狂犬』をコイツがその狂犬だ！」

F「なんだと!？」

F「切れたら相手をボコボコにするまで許さないって言う」

F「あの狂犬がこの学校に！しかも同じクラスかよ！？」

雄二「それが今は俺達の味方だ」

F「おお、そうだな」

F「怖いものなんて無いな」

雄二「ただ、明久と咲耶の2人に手を出したら知らないがな」

F「うっ、そ、それは……」

雄二「それに健もAクラス並の実力を持つ。当然俺も全力を尽くす」

F「坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ」

F「確かになんかやれそうな気がしてきたぞ」

F「これはいけるんじゃないか！？」

F「よし！やってやろうじゃねーか！！」

今教室の士気が高まっていったが

雄二「それに吉井明久だっている」

というシーンと教室内は静まりかえった。

F「誰だよその吉井明久って」

F「それ以前にそんな奴らこのクラスにいたか？」

明久「雄二！何でそこで僕の名前をだした！？」

せっかく上がった士気が台無しだよね！！」

明久が文句を言うと、雄二が睨み付けてきた。

雄二「そうか、知らないのなら教えてやる。

こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

雄二を信じた僕がバカだったよ！！

F「確か観察処分者って「馬鹿の代名詞」じゃなかったっけ？」

明久「ちっ違うよ！！ちよっとお茶目な16歳の愛称で…」

雄二「そうだ『馬鹿の代名詞』だ」

明久「肯定するなバカ雄二！！」

姫路「あのそれってどういうものなんですか？」

健「観察処分者っていうのは具体的には教師の雑用係だな。

力仕事とかの雑用を特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ」

姫路「それって凄いですね！試験召喚獣って見た目と違って力持ちらしいですし」

明久「あはは。そんな大したものじゃないよ。

確かに僕なんかの点数でも召喚獣の力はかなり強いけど、その時受ける召喚獣の負担の何割かは僕にフィードバックされるんだ。

皆と同じで教師の監視下でしか呼び出せないし僕にメリットもないしね」

F「おいおい・・・じゃあ召喚獣がやられたら本人も苦しいって事だろ？」

F「だよな・・・それならおいそれと召喚できないヤツがいるって事じゃん」

雄二「気にするな！明久はいてもいなくても大して変わらん雑魚だ」

明久「雄二そこは僕をフォローするところだよな」

雄二「明久お前何回ぐらい召喚獣を操作した？」

明久「あれ？スルーされた？」

雄二「いいから答えろ」

明久「えつと……100回以上かな」

雄二「皆聞いたか、このバカは召喚獣を使っているんな雑用をしている。」

要するに、何度も召喚獣を使ってるから操作に慣れてるんだ。だから、細かい操作もできる。相手の防御してないところを攻撃したり、

攻撃をいなしでカウンターを掛けたりとかな。

細かな操作ができれば点数が上のやつとでも十分渡り合えるんだ

余程のことがない限り、同学年では攻撃が当たらない筈だ」

F「なるほど…」

雄二の説明に納得するFクラスメンバー

雄二「だから明久はまわりのヤツラからみたらただの役立たずに見

えるが

実は俺達の切り札にもなるわけだ!!」

F「それって凄いな」

健「ゆ、雄二が明久のことをフォローしただと……」

咲耶「本当だね。いつもならお兄ちゃんのことからかうのに……」

雄二「と、とにかくだ！俺達の力の証明としてまずDクラスを制圧しようと思う。

皆この境遇に大いに不満だろう？」

F「「「「「当然だ!!」「」「」「」

雄二「なら全員筆を執れ!!出陣の準備だ!」

F「「「「「おおー————ツ!!」「」「」「」

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ!!」

F「「「「「うおおー————ツ!!」「」「」「」

姫路「おッおー／／／」

姫路も恥ずかしげに掛け声をあげた。

健「面白くなりそうだな。明久！咲耶頑張ろうな!」

咲耶「もちろんです！」

明久「あまり無茶しないでね咲耶」

咲耶「うん！」

俺たちの戦いの幕が開いた。

雄二「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の死者になって貰う。

無事大役を果たせ！」

明久「……下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？

しかも今、字が違わなかった？」

雄二「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみろ。俺は友人を騙す事はしない」

明久「わかったよ、さっき僕をフォローしてくれたもんね。

なら使者は僕がやるよ」

健「ちょい待ち！」

雄二「なんだ健？」

健「最初の相手はEクラスにしてくれ頼む」

雄二「……何が理由かわからないが……いいだろう。」

明久「じゃあDクラスじゃなくEクラスに宣戦布告してくれ」

明久「うん、わかったよ」

結局雰囲気の流れ、明久は意気揚々と出ていった。

数分後

明久「騙されたあつ!!」

そのしばらくの後、明久が教室に転がり込んできた。

Eクラスにつかみかかれ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は一言。

雄二「やはりそう来たか」

明久「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

健が来てくれなかったら、今頃どうなってたと思ってるんだ
!?!」

雄二「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」

明久「雄二を信じた僕がバカだったよ!!」

健「まあ落ち着けよ明久。雄二が酷いのは今に始まった事じゃないだろ？」

そこへ健が戻ってきて、明久を宥める。

明久と違い無傷のその姿に、雄二は一言。

雄二「……殺してないだろうな？」

健「大丈夫だ。恐怖を覚えさせたただけだ」

雄二「……お、恐ろしいな」

健「雄二。今回はいいけど、次は……」

雄二「……ああ」

雄二が顔を少し青ざめて言う。

姫路「吉井君、大丈夫ですか？」

島田「大丈夫、吉井？」

制服までぼろぼろにされた明久に、姫路と島田が駆け寄ってきた。

明久「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

島田「そう、良かった……ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

明久「ああっ！ もうダメ、死にそう!!」

島田もバカだな。照れ隠しであんな事言っただけで正直になればいいのに。

明久にいつ春がくるかな？

そして俺はうめき声を上げている明久に、手を差し伸べる。

健「……ほら、立てるか明久？」

明久「うん、ありがとう」

咲耶「お兄ちゃん次からはもう少し考えてから動いてよ……」

雄二「そんな事より、今からミーティング行っぞ？」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ

ウチのクラスは 最強だ

そして、屋上にて。

雄二「で、明久。時間は伝えたのか？」

明久「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」

雄二「今日も弁当か」

健「ああ、そうだな。ほら明久、咲耶」

明久「悪いね」

咲耶「ありがとうございます」

俺は明久と咲耶に弁当を渡すと

明久「じゃあ！いただきます！」

パクパクパクパク

健「おい落ちついて食べるよ」

月火「そくだよお兄ちゃん。お弁当は逃げないんだから」

明久「おいしそうでつい」

姫路「あれ、そのお弁当って？」

咲耶「健君が作ってくれたんだよ」

明久「健の料理は美味しいからね」

健「明久には劣るかな」

咲耶「お兄ちゃんも料理上手いから」

島田「え？吉井が料理できるの？」

明久「うん、できるよ」

姫路「う、嘘です。吉井君が料理できるなんて信じられません」

島田「そうよ。吉井に料理なんて！」

雄二「いや、明久は料理できるぞ」

月火「お兄ちゃんの料理は上手いから。私もまだ勉強しないと」

秀吉「明久の料理は美味しいからの」

康太「・・・・・・・・・・また食べたい」

姫・島「信じられません（信じられない）」

雄二「さて話を戻すぞ。試召戦争についてだ」

秀吉「雄二よ。1つ気になったんじゃが

どうして最初はAでもEでもなくDクラスに挑もうとしたんじゃ？」

雄二「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。

明久見てみる。ここにいるメンバーを」

雄二が明久に集まったメンバーを見ると言い、明久は全員の顔を見回し言っと、

明久「えーと、美少女が2人、バカが2人にムツツリが1人と

妹が1人、親友が1人いるね」

雄二「誰が美少女だと!？」

明久「どうして、雄二が美少女に反応するの!？」

康太「……………(ポツ)」

健「誰がムツツリだと!？」

明久「ムツツリーニと健まで!？ どうしよう!？ 僕だけじゃツツコミ切れないよ!？」

美少女に雄二と康太が反応して明久は声を上げる。

秀吉「まあまあ皆落ち着くのじゃ」

咲耶「そうだよ。健君は悪ノリしないの」

健「わりい、ついノリで」

咲耶と秀吉で明久たちを落ち着かせると

雄二「ま、要するにだ」

コホンと咳払いして雄二が説明を再開する。

雄二「咲耶や姫路に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。」

Aクラスが目標である以上、Eクラスなんとか戦っても意味がないってことだ」

明久「？ それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明久「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？

それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦における
必要なプロセスだしな」

秀吉「でも健がEクラスと戦う事を望んだんじゃない」

雄二「ああ、健どうしてEクラスと戦う必要があるんだ？」

健「理由は簡単だ！俺が戦いたいからだ！」

雄二「はっ？」

健「だって俺、試験途中退席だから点数が無いんだぜ。」

それでDクラス戦からはじまったら最後の方しか戦えないだろ？
なら、今日Eクラスとやれば次回Dクラス戦は丸々戦えるじゃないだろ」

秀吉「……もしかそれだけのためにじゃと？」

健「まあそれ以外にもあるぞ。」

それはEクラス戦ならそこまで点数差が激しくないから
Fクラスでもすぐに戦死しないはずだ。

そこで操作技術を高めればそれ以降の戦いも少しは楽になるかな。
らな。

つまりは今日の戦争は勝って当たり前だから。

召喚獣の操作を高めることが目的だな」

雄二「……ふむ、それも悪くないな」

明久「でもEクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる……いいか、
お前ら。」

ウチのクラスは 最強だ」

島田「良いわね。 面白そうじゃない！」

咲耶「頑張ります」

健「暴れてやるぜ」

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「・・・・・・・・・・・・・・・・（グツ）」

姫路「が、頑張りますっ」

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた。

ウチのクラスは 最強だ（後書き）

皆さんの感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136ba/>

バカと兄貴と召喚獣

2012年1月14日22時55分発行